

春の行事案内

今年は例年おこなっていた天ぷらギフは止めて昨年夏合宿で利用したことのある八ヶ岳清里の小平山荘に一泊し、当日は各グループごとに入笠山、櫛形山、立場沢、他でヒメギフ等採集、観察、撮影して、後山荘に集合し、夕食後、成果発表、懇親会を催す予定です。翌日自由開散といたします。もちろん天ぷらギフで一緒している群蝶会の皆さんも参加の予定です。

期日：5月5日泊、翌6日自由開散

会費：大人 3500～4000 円、子供 2000 円（含む1泊2食、飲み代）の予定

参加申し込み：多摩虫メール、又は企画幹事（仲西、小柴、北川、早坂）宛て連絡ください。山荘には仮予約を入れてありますが10日前まで変更可ですので4月25日までお願い致します。

小平山荘詳細：山梨県北杜市高根町清里念場原 3545 TEL：0551-48-2146

後日参加者には地図をお知らせいたします。

その他：雨天決行いたします。ご家族の方の参加も歓迎いたします。

御希望により、グループ編成、車の手配は幹事が調整致します。

巨星落つ

テングアゲハ、ルソンカラスアゲハで知られる五十嵐邁氏が4月6日に永眠されました。謹んで哀悼の意を表します。氏はチョウのアマチュア研究者としてたぐいまれな才能を発揮し、度重なる海外遠征とともに熱帯アジア産の多くの種の生態解明を行い、見事な精密画を基に供著による熱帯アジア産蝶類生態大図鑑他を世に送りだし蝶愛好者に鮮烈な印象を与えるとともに大きな力と夢をもたらし世界に日本蝶界の意気を大きく広めた。間違いなく一時代を開きアマチュアの先導役として大きな啓蒙を行ったといえる方であったといえるでしょう。

蝶界においても一般社会と変わらず高齢化が進んでおり今後の蝶界の行く末が心配であるが、これからの蝶界は誰が引っ張ってゆくのであろうか？虫で禄を食む学者は別としても蝶界は圧倒的にアマチュアのほうが多いのであるからやはりここはアマチュアの出番でありたいと思う、福田晴夫、高橋真弓、藤岡知夫氏等であらうか？そしてあとに続くものは…いずれにしろお互い健康第一に徹し、この楽しい趣味を続けながら蝶界発展のため切磋琢磨しようではありませんか！

* 3/15 に総会が開かれました。92名（出席27名、委任状65名）を持って成立し前号

のミニたま掲載案を審議しすべて承認されました。

* 退会

高橋清英

* 新入会員（宜しく願いいたします）

藤田喜彦 220-0025 川崎市川崎区下並木 11-5-2-902 T.F : 044-246-0501

fwkg5411@mb.infoweb.ne.jp

* メルアド変更

小林武雄 ja5piokobatake@vcsand.ocn.ne.jp 山上英信 yamagami@fol.hi-ho.ne.jp

* 以下のかたより寄付をいただきました。厚く御礼申しあげます。

柏倉美由喜 ¥1000 仲西周二 ¥3000

新種クワガタ 捕獲禁止

環境省は24日、国内で昨年11月に新種として公表されたクワガタについて、種の保存法に基づき緊急指定種に指定したと発表した。今年1月に、インターネット上のオークションで取引されていたことが判明、このまま放置すれば、乱獲で絶滅の危険が高いと判断した。指定期間は26日から3年間で、捕獲や譲渡が禁止される。

指定されたのは、体長が1センチほどの「タカネリクワガタ」
|| 写真、発見者の井村有希さん提供 ||。オス（写真左）は青緑、メス（同右）は銅色の金属光沢があるなど美しい色彩が特徴。生息地は非常に限られるため、公表されていない。

同省によると、このクワガタのつがいが今年1月に、オークションに出品され、約11万円の値段で落札されていたという。同省では、指定期間中に詳しい生息の実態調査を行い、国内希少野生動物植物種に指定するかどうか検討する。

緊急指定されたのは過去に、1994年にワシミミズクなど3種があるだけ。

ネット売買発覚、絶滅危機



冬の間に、マツの害虫駆除のために行われる「こも巻き」は、クモなどの益虫を大量に捕獲する一方、枯死の原因となる害虫にほとんど効果がないことが、兵庫県立大の新穂千賀子准教授（昆虫生態学）らの調査でわかった。姫路城（兵庫県姫路市）で4年間に捕まっていたのは益虫55%に対し、害虫はわずか4%。逆効果にもなりかねず、今後の対策のあり方に一石を投じそうだ。

マツのこも巻きは、初冬にわらで編んだこもを幹に巻き付け、春先に外して焼く。暖かいこもに集まるマツカレハの幼虫などを一網打尽にできるとされる。

新穂准教授らは、姫路城で、外した直後のこも約3,500枚に、どのような虫がいるか2002年から05年まで調査した。

マツカレハ幼虫は02、04年は0〜6匹、最多の05年でも44匹にとどまった。マツ枯れの最大の原因になるマツノサイセンチュウを媒介するカミキリはゼロだった。逆に、害虫を捕食するクモ類は毎年3337〜625匹、カメムシの一種のヤニシガメも90〜486匹確認された。

マツカレハ幼虫は、樹皮の裏



こも巻き逆効果

側が多いという報告もあり、こもを外した幹の割れ目で見つかり、夏には多数のさなぎも見つ

捕まるのは 益虫ばかり

08.3.22 読売(9)

マツのこも巻きは、江戸時代から大名庭園で行われていたと言われている。姫路城では1960年代から恒例行事になっている。しかし、効果が薄いという意見は以前からあり、マツの名所では、三保の松原（静岡市）や岡山後楽園（岡山市）で実施しているが、皇居外苑や京都御苑は20年以上前にやめた。浜松市は今年中止し、神奈川県平塚市も廃止を検討している。

新穂准教授は「こもは益虫に越冬場所を提供する面もあるのだ。続けるなら、害虫を逃がした後に焼く方法を考えたい」と話す。

姫路城管理事務所は「確かにクモが目立ったが、益虫という認識はなく、ずっと焼却してきた。方法を検討したい」としている。

マツのこも巻きの実施状況		
借楽園	(水戸市)	X
皇居外苑	(東京都)	X
三保の松原	(静岡市)	○
兼六園	(金沢市)	X
気比の松原	(福井県敦賀市)	X
彦根城	(滋賀県彦根市)	○
京都御苑	(京都市)	X
天橋立	(京都府宮津市)	X
姫路城	(兵庫県姫路市)	○
和歌山城	(和歌山市)	○
岡山後楽園	(岡山市)	○
縮景園	(広島市)	○
小倉城	(北九州市)	○
虹の松原	(佐賀県唐津市)	X

熱帯の色鮮やかなチヨウから、深海の甲殻類、土中に潜む微生物まで。地球上には未知のものを含め、3000万種を超す生物が生息していると推測されている。30億年以上の生物の歴史の中で、様々な環境に適応して、形態や機能を少しずつ進化させた結果だ。

中でも、中米コスタリカは、地球上の全生物の5%が生息する生物の宝庫。九州と四国を合わせたほどの面積しかないが、地形が変化に富み、多様な生物が進化したと考えられている。

この国で、科学者を中心に1989年に設立された生物多様性研究所(INBIO)のルイス・アコスタさん(33)は月2回、植物や土壌の微生物などを採取する。企業や大学の依頼を受けた生物資源探査だ。

INBIOは、生物の多様性をビジネスに結びつけて自然保護に役立てる先駆け。企業などから集める資金の10%と、共同研究の成果から得られる利益の50%を生産系保全に使う。

91年には、世界的な製薬会社メルク社と契約。99年

進化論 あなた

加速する種の絶滅

4

森林で植物のサンプルを採集する生物多様性研究所のルイス・アコスタさん(右)と昨



まで約3億5000万円の資金を得て、植物や昆虫、微生物を提供した。コスタリカにある製薬会社は、INBIOが見つけた植物の葉から鎮静剤、木の皮から胃腸薬を作る。ロドリゴ・ガメス所長(71)は「収益はまだ十分ではないが、住民が生物多様性の大切さに気づくきっかけになった」と胸を張った。

青カビから抗生物質のベニシリンが発見されたように、生物が作り出す天然物質は今も、病気の治療薬や化粧品の有効な素材だ。

こうした生物資源はかつて、「人類共通の財産」だった。しかし、実態は先進国による一方的な収奪に近く、原産国には見返りはなかった。このため、93年に発効した生物多様性条約は「権利は原則的に生物が生産する国が有する」と、原産国の権利を認めた。

これを受け、ペルー政府が2006年、アマゾン原産の植物「カム・カム」を利用した特許について「海賊的行為」の疑いがあると主張するなど、各国は資源の囲い込みを始めた。当然の権利行使だが、先進国も無関心ではいられない。

国内では、独立行政法人「製品評価技術基盤機構」が音頭をとって03年から、インドネシア・アベトナム・モンゴルで、各政府の了解を得て微生物の採取を始めた。しかし、収集・保存する株数は、米国の3分の1以下で出遅れ

は否めない。

そんな中、二村聡さん(44)は、熱帯の自然に恵まれたマレーシアと日本をつなぐパイプ役として活躍する明治大学農学部卒業後、クアラルンプールで日本語教師などをしていた時に、熱帯の薬用植物の魅力を紹介する本にたまたま出会って、飛び込みでゴム研究所に提携を申し込んだ。

00年には熱帯雨林の生物から有用物質を探索する会社を設立。スタッフを雇い、マレーシア国立森林研究所内に研究室も構える。マレーシア全土の森林を調査できる権利も獲得した。

しかし、人間による自然破壊は生物の種の絶滅速度を100〜1000倍も加速して、生物の多様性を脅かしている。国際自然保護連合の調査では、哺乳類の5分の1、鳥類の8分の1、両生類の3分の1が絶滅の危機にある。マレーシアでも、熱帯雨林が大規模伐採されている。

「森林を伐採するなどというだけでは先進国のエゴ。森林を伐採しなくても経済的に成り立つ仕組みを作りたい」。現場を知る「村さん」は今、こう考えている。

08.3.14 読者

「権利は原則的に生物が生産する国が有する」と、原産国の権利を認めた。

これを受け、ペルー政府が2006年、アマゾン原産の植物「カム・カム」を利用した特許について「海賊的行為」の疑いがあると主張するなど、各国は資源の囲い込みを始めた。当然の権利行使だが、先進国も無関心ではいられない。

国内では、独立行政法人「製品評価技術基盤機構」が音頭をとって03年から、インドネシア・アベトナム・モンゴルで、各政府の了解を得て微生物の採取を始めた。しかし、収集・保存する株数は、米国の3分の1以下で出遅れ

MONOLOG

カブトムシフンの山

08.4.7読者(19)

昨夏、茨城県つくば市内の雑木林で捕まえたカブトムシが卵を産み、今は体長10センチほどの幼虫に成長している。驚くのは、その食欲だ。成長具合を確かめるため、飼育ケースのなかに手を入れてみた。すると、小指のツメほどの大きさの塊が、ごっそりと出てきた。幼虫が出したフンだった。

周りがフンばかりでは幼虫も苦しいだろうと思い、ふるいにかけてフンを取り出した。フンがなくなると、ケースの土はすっかり減ってしまった。

ペットショップで土を買い、補充した。幼虫を育て始める時にも土を買った。あわせて数千円。カブトムシ飼育は意外とお金がかかる。

土はどこにもあるが、筑波山の登山道では、腐葉土を持ち帰らないことと看板が立っているし、近所の畑の土を取るわけにもいかない。

お金に頼らないと、カブトムシを育てられないというのは寂然としない。先日、筑波山に林を持つ人と知り合って、そんな話をしたら「うちの土を持って行きなさいよ」。これからは土も地元産で賄えそうだ。

さて、取り出したフンの山。顔見知りの研究者に聞くと「堆肥効果はありますよ」。これで夏野菜を育てよう。きつと、おいしくなるはずだ。(三)

